

高麗寺跡塔心礎の特異性に関する再検討

中村真里絵

2026年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

高麗寺跡塔心礎の特異性に関する再検討

中村 真里絵

1. はじめに

高麗寺跡は京都府木津川市山城町上狛字高麗寺に所在する、渡来系氏族狛氏の氏寺であったと考えられる古代寺院である(図1)。大正7年より存在が確認され、昭和15年に国の史跡として保存されている。その後、昭和57年から61年に寺域確認調査、平成21年から整備目的の発掘調査が行われ、平成22年度から整備事業が実施され、令和3年度に整備が完了している。

ところで、高麗寺跡は昭和13年の調査の際、塔心礎の舍利穴の穿たれた位置に特異性があることが指摘されている。本稿では高麗寺跡の塔心礎に着眼し、高麗寺跡の調査史や塔心礎の研究史を確認することで、現状の研究の到達点を確認する。そして、国内の類似事例と比較・整理を行うことで、高麗寺跡塔心礎の特異性の再検討を行うことを目的とする。



図1 高麗寺跡位置図(国土地理院 1/25,000)

2. 塔心礎の名称についての説明

本稿では、塔心礎や塔心礎の加工痕の用語を多用する。そのため、先に塔心礎の持つ役割や各部位の名称を概説する。塔心礎とは、塔内部の心柱を支えるための土台にあたる礎石であり、舍利を納める役割を備えるものもある。巨大な心柱を支えるため、直径1メートル前後の巨石が用いられる傾向にあり、日本国内では現時点で270例以上が確認されている。そして、塔心礎表面には、目的に応じて加工が施されるため、発見された塔心礎表面には加工痕が残るものが多い。主な例としては、①心柱を支えるための平らな造り出しである柱座、②心柱を固定するための柱穴、③心柱の底部に造り出された出柄を固定するための柄穴、④心柱を支えるための添木を固定するための添木穴、⑤心柱の底部に造り出された柄穴を固定するための作り出しである出柄、⑥塔心礎や心柱に溜まる水を排出するための排水溝、⑦舍利容器を納めるための舍利穴、があげられる(図2)。

さらに塔心礎は基壇に据えられる位置に違いがあり、位置の違いによって3種類の名称が存在する(図3、佐川2010)。まず、古い段階に相当する心礎は、旧地表面に心礎据え付

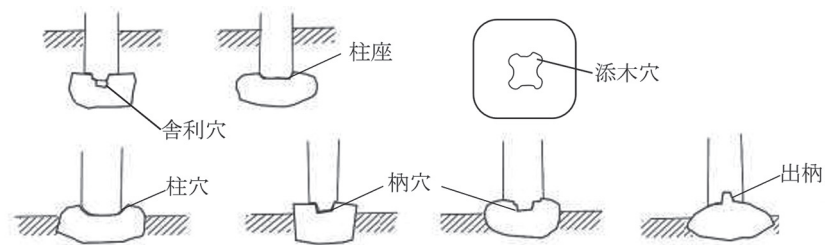


図2 塔心礎に施される各種加工痕の名称 (内藤2017・2018を参考に作成)

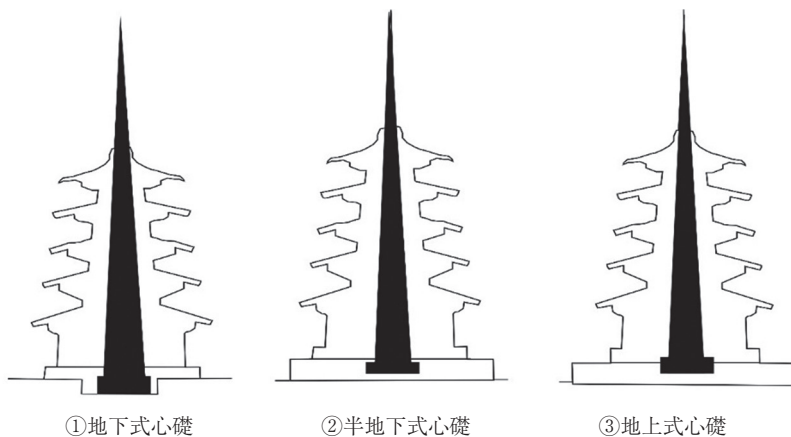


図3 塔心礎の据える位置(佐川2010をトレース)

け穴を掘削し、塔基壇の底面に据える地下式心礎である。次に、基壇土築成と同時に心礎を基壇中に据える半地下式心礎(壇中式心礎)が出現する。旧地表面に近い位置に据えるものを壇下式と呼称する例もある。そして、塔基壇の表面に塔心礎表面が露出する形式を地上式心礎という。

地下式心礎の主な例では、日本最古の寺院である飛鳥寺が該当する。半地下式心礎では、現時点で日本最大の塔心礎が発見された奈良県尼寺廃寺、地上式では奈良県本薬師寺や吉備池廃寺が該当する。

3. 高麗寺跡の調査史

高麗寺跡は、大正7年に京都府史蹟勝地調査会による現況調査が行われた(梅原1919)。その際に土壇と8世紀代の瓦が散布していることが確認されたため、寺院の存在が認められた。昭和10年には里道の改修工事に伴い、南方の土壇が削平された。その際に、大量の古瓦とともに基壇が発見されたが、礎石が2個壊された。さらに南方土壇東方の新魚池付近で瓦窯が発見された。転用されている礎石も確認された。

この改修工事を契機とし、昭和13年に中津川保一氏、田中重久氏、木村捷三郎氏によって南方土壇上での試掘調査が実施された(田中1938)。調査により塔心礎の存在や、塔・金堂の規模が確認され、伽藍配置が法起寺式であることが明らかとなった。さらに、飛鳥時代様式の軒丸瓦や、「中臣」銘の平瓦、飾り金具などの遺物が発見された。同年に試掘調査の結果を踏まえたうえで、梅原末治を中心とした京都府史蹟勝地保存委員会が本格的な調査を実施した(梅原1939)。塔、金堂ともに基壇化粧が瓦積基壇であることが確認され、塔は基壇の内側に瓦積、外側に石敷を巡らす特殊な基壇形式であるが、金堂は石敷を巡らさない形式であることが確認された。さらに塔心礎の舍利穴の位置が、従来見られるような塔心礎の表面ではなく、南側面にあるという特異性も指摘している。以上の調査成果により、高麗寺は飛鳥時代に創建され、白鳳時代に全体の伽藍配置が整備された。そして、平安時代に廃絶するという沿革を辿ったことが明らかになった。

そして昭和15年に主要堂塔含む一部が国の史跡として保存されることとなり、山城町教育委員会によって昭和59年から昭和63年の5年間、範囲確認調査が行われた(山城町1989)。各建物跡から出土した軒瓦の割合の比較研究によって、堂塔の造営序列が復元された。さらに、寺域の範囲や谷を巧みに利用した伽藍計画が行われたことや、高麗寺の創建に関わるとみられる瓦窯や鑄造遺構も確認されている。

そして、史跡整備に伴う基礎調査として平成17年から平成21年にかけて追加調査が実施されている。この調査では中門、南門の位置が西に偏っていると同時に、金堂、中門、南

門が一直線上の配置であったことが判明している。この成果を受けて、史跡整備事業が平成22年度から開始され、令和3年度に整備事業が終了した。

4. 塔心礎の研究史

次に本稿のテーマである、塔心礎に関する研究史を整理し、現時点での到達点を確認する。戦前において塔心礎は、塔の存在や位置を示す重要な遺物であり、形の違いによって型式編年が研究されていた。舍利穴は塔心礎の型式分類の基準のひとつとして認識されており、石田茂作氏や田中重久氏、足立康氏らによって型式分類が行われた。この時点で高麗寺跡の舍利穴は、従来発見されていたような、塔心礎中央に円形または方形の舍利穴を持つものではなく、ドーム形の舍利穴を南側面に持つ珍しい例として注目されており、当時高麗寺跡の試掘調査にあたった田中重久氏は羽曳野市西琳寺の塔心礎との類似性を指摘している(田中1938)。そして、塔心礎が据えられる位置や加工痕を基準としたきめ細かな全国的な編年案を提示し、時期が下るにつれて塔心礎を据える位置が地下式から地上式に上昇する傾向にあり、また、舍利穴は奈良時代前期から後期にかけての塔心礎に多く見られ、舍利穴をふさぐための石蓋の受け部があるものは飛鳥時代～奈良時代前期のものが多く傾向にあり、排水溝や出柄を持つものは奈良時代後期以降のものが多く傾向にあることを言及し、日本国内を中心とした塔心礎の変遷を示している。加えて、高麗寺跡塔心礎を飛鳥時代に造られたものとし、「床面心礎－加心礎－一凹式－一段式横穴式半圓舍利穴凹座心礎」という類例がない特殊な型式として位置づけた(田中1939)。西琳寺跡塔心礎と同型式に位置付けなかった理由としては、西琳寺跡塔心礎の柱穴が、高麗寺跡塔心礎のような、通常の円形柱穴ではなく、通常の柱穴周辺に添木穴を複数もつ型式であったことや、舍利穴の上半分が残っていなかったことであると考えられる。

田中氏の編年案以降、新たに提起された編年案は、1983年の岩井隆次氏の案である(岩井1983)。岩井氏は、高麗寺跡塔心礎と大津市崇福寺塔心礎を、塔心礎側面に舍利穴を持つ塔心礎として同じ型式に位置付けている。そして、添木穴を持ち、柱穴側面に舍利穴を持つ型式として西琳寺塔心礎と、羽曳野市野中寺塔心礎を同じ型式としている。また、川崎市影向寺塔心礎、八幡市西山廃寺(足立寺)塔心礎も塔心礎中央ではなく、柄穴の端部に舍利穴を持つ塔心礎として分類され、尼崎市猪名寺廢寺も塔心礎表面に柱穴や柄穴に接続しない舍利穴をもつ型式として分けられている。

2000年代以降に入ると、百濟王興寺をはじめとした、中国、朝鮮半島などの東アジアの古代寺院の発掘調査が進み、日本と類似した伽藍配置や舍利容器が注目されることとなった。そのため、畿内を中心とした古代寺院の舍利埋納方法の起源を、東アジアの古代寺院

に求める研究が行われた(岡林2010・佐川2020)。特に、奈良県飛鳥寺の塔心礎と、百済王興寺の塔心礎には、方形の塔心礎の表面に方形穴が穿たれていることや、出土した舍利荘厳具に共通性が見られていることから、飛鳥寺の持つ情報を再整理する研究が盛んに行われている。東アジアの古代寺院研究が進められたことにより、飛鳥寺の塔心礎の舍利穴に、後期古墳の一部の石室と同じように朱塗りが施されていることから、舍利穴を持つ塔心礎は後期古墳の石室を起源としているという考察が岡林孝作氏によって行われている(岡林2010)。

また、著者は2024年にインド・ガンダーラ周辺諸地域の舍利埋納の方法と、古代日本の舍利埋納を比較しており、インド・ガンダーラ周辺諸地域で本来用いられていた石棺が、朝鮮半島にて塔心礎の舍利穴として独自に簡略化した形となり、日本に伝えられたと考えている(中村2024)。

そして高麗寺跡塔心礎の舍利穴の形の起源については岡林孝作氏が触れている。高麗寺跡塔心礎と崇福寺跡塔心礎の特殊な舍利穴について、唐代で流行した棺形舍利容器と、墓室を模倣とした地宮の発達によって与えられた影響であると考え、崇福寺跡出土の舍利容器や、崇福寺跡塔心礎、高麗寺跡塔心礎などが持つ、側面に穿たれたドーム形舍利穴は形状から当時の日本国内の墓室である横穴式石槨を模倣したものとした(岡林2024)。

2025年には飛鳥寺塔心礎から出土した遺物の再整理の成果が公開され、塔心礎に納められた舍利容器・甲の復元が行われ、不明であった日本に仏教が伝来した初期の時期の塔心礎を伴う仏舍利埋納の様相が明らかとなっている(奈良文化財研究所2024・2025)。

以上のような研究成果によって、日本国内を中心とした東アジアの塔心礎の変遷過程や舍利埋納方法の起源が明らかとなった。そして高麗寺跡の塔心礎については、①崇福寺跡と同型式であり、唐代の舍利埋納方法に影響を受けている可能性がある。②羽曳野市西琳寺や野中寺とも類似性があるとみられる。ということが現状の到達点である。これらを踏まえ、高麗寺跡をはじめとした、塔心礎の表面中央に舍利穴を持たない事例を整理し、編年に当てはめる。そして観察できた塔心礎については観察を踏まえた所見も記載し、高麗寺跡塔心礎の特異性を再検討する。

5. 出土事例の整理・再検討

まず、日本国内の塔心礎の表面中央に舍利穴を持たない事例を整理する。国内では、研究史でも名が挙がった、飛鳥寺・高麗寺跡・崇福寺跡・野中寺・西琳寺・猪名寺・西山廃寺・影向寺の8例の塔心礎が当てはまる(表1)。この8例の塔心礎からは舍利容器が発見されていない。そのため、舍利穴の大きさが、舍利容器が出土している塔心礎の舎

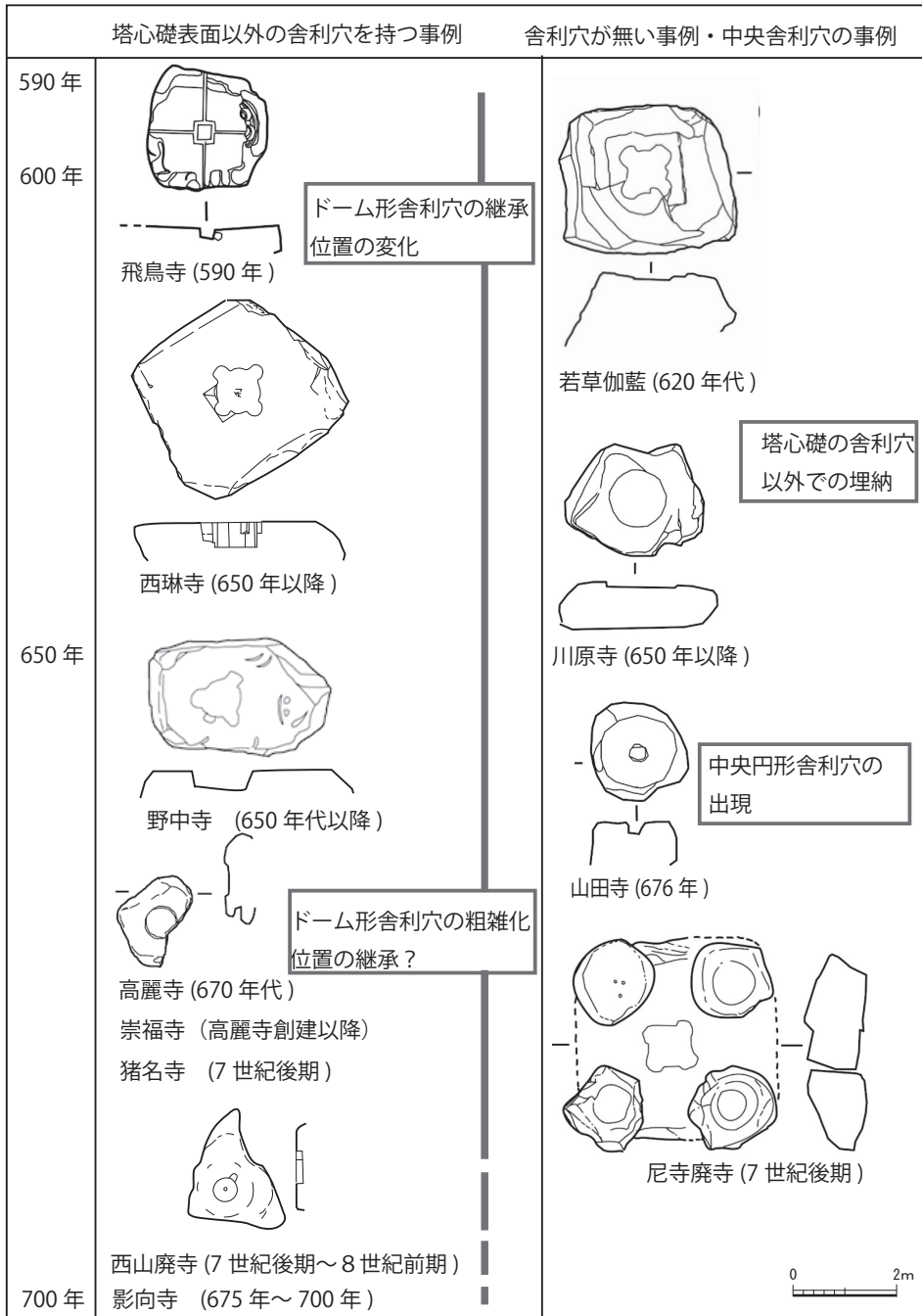


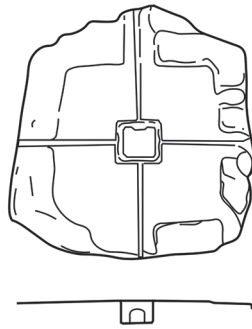
図4 塔心礎の変遷(図は各報告書を再トレース)

表1 研究対象の塔心礎

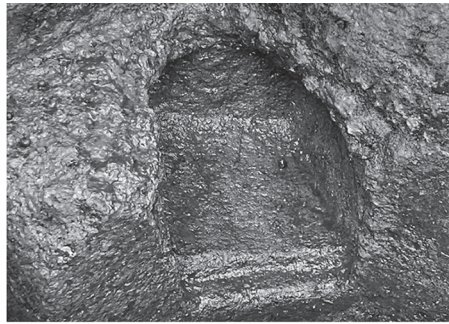
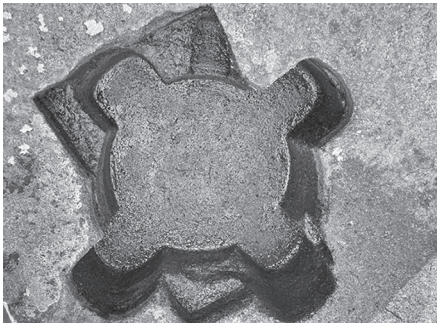
寺院名	所在地	創建年代	原位置	舍利穴の形状	舍利穴の位置	舍利穴の法量	備考
飛鳥寺	奈良県高市郡	590年	○	ドーム形	方形穴東側面(西に開口)	幅約12cm 奥行約12cm 高さ約12cm	西に開口する唯一の例、石蓋受け部あり
西琳寺	大阪府羽曳野市	650年以降	×	ドーム形	柱穴側面	幅13cm 奥行19cm 高さ約12cm	石蓋受け部の加工が丁寧、天井部は欠損
野中寺	大阪府羽曳野市	650年以降	○	ドーム形	柱穴南側面	幅15cm 奥行上方16cm 下方14cm 高さ7.5cm	石蓋受け部の加工が丁寧
高麗寺跡	京都府木津川市	670年代	○	ドーム形	塔心礎南側面(南に開口)	幅19cm 奥行31cm 高さ16cm	石蓋受け部の加工が粗い
崇福寺跡	滋賀県大津市	670年代以降	○	ドーム形	塔心礎南側面(南に開口)	幅21cm 奥行27cm 高さ18cm	石蓋残存
猪名寺 麩寺	兵庫県尼崎市	7世紀後半以降	×	円形	塔心礎表面	径12cm 深さ10cm	柱穴に接していない
西山麩寺	京都府八幡市	7世紀後期～8世紀前期	×	ダルマ形	柄穴北側面(上面・南に開口)	長径13cm 短径10cm 深さ18cm	石蓋受け部無し、くり抜いたような造り
影向寺	神奈川県川崎市	675年～700年	×	ダルマ形	柄穴北側面(上面に開口)	径15cm 深さ10cm	西山麩寺より加工が粗い?

利穴と大きさに変わりがない穴を舍利穴としたところ、すべて舍利容器を埋納できるほどの大きさを有すると判断できると考えた。したがって、これらの出土先である寺院および塔心礎の情報の整理を試み、従来の編年での位置づけを行う(図4、表1)。そして、高麗寺跡塔心礎の特異性についての再検討をする。また、野中寺・西琳寺・猪名寺麩寺・西山麩寺については実物を観察できる機会に恵まれたため、観察の所見も示す。

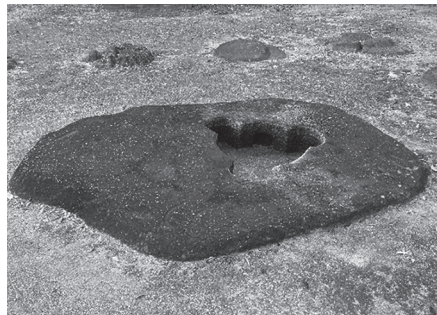
整理を試みた上で注目したい点は、舍利穴が造られた位置および開口している方向と、舍利穴・舍利穴周辺の加工痕の形状の2点である。舍利穴が造られた位置と開口方向については、①塔心礎の南側面、②柱穴・柄穴の側面、③塔心礎の表面の3つに分けることができる。また、柱穴ではなく方形穴の側面に舍利穴が造られた飛鳥寺については②に分類する。①は高麗寺跡・崇福寺跡、②は飛鳥寺・西琳寺・野中寺、③は猪名寺麩寺、②③どちらの可能性も考えられるものとして西山麩寺・影向寺に分ける。①、②のうち、高麗寺跡・崇福寺跡は南側面に舍利穴が開口し、野中寺も柱穴側面の南方向に開口している。一方、飛鳥寺のみ東側面に舍利穴が開口している。西山麩寺は現在は原位置を保っていないが昭



飛鳥寺塔心礎 奈良文化財研究所 1958 から



西琳寺寺塔心礎 (左: 全景、右: 舍利穴) 筆者撮影

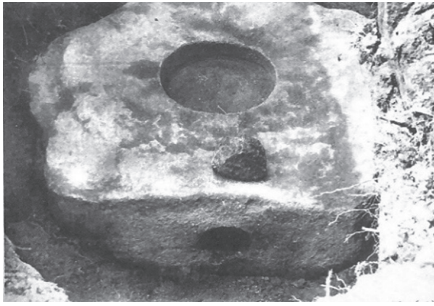


野中寺塔心礎 (左: 全景、右: 舍利穴) 筆者撮影

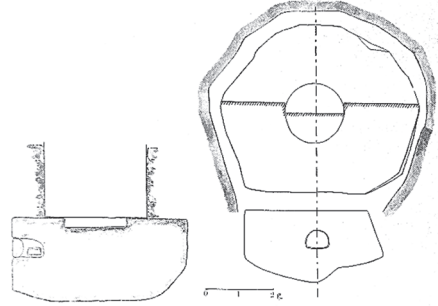


高麗寺塔心礎 (左: 全景、右: 舍利穴) 木津川市教育委員会 2022 から

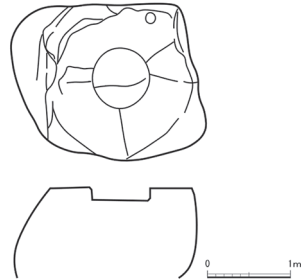
図5 塔心礎 1



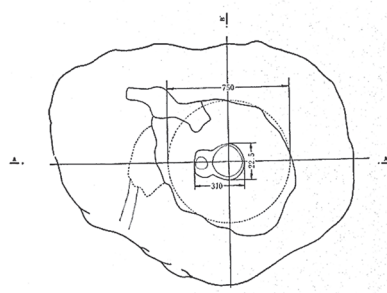
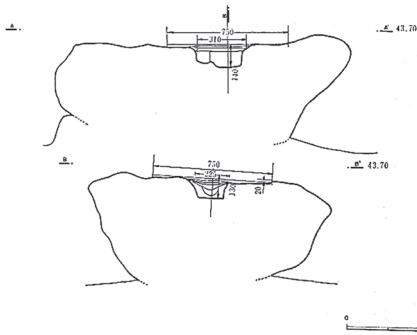
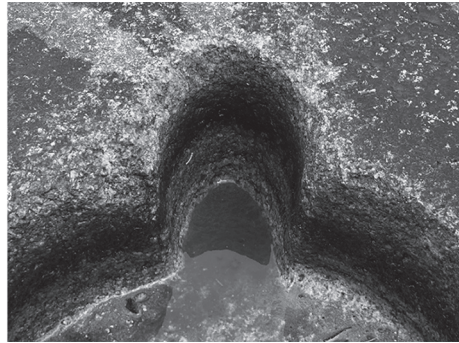
崇福寺塔心礎 (滋賀県 1974 から)



猪名寺塔心礎 (左: 筆者撮影、右: 尼崎市教育委員会 1984 再をトレース)



西山庵寺塔心礎 (左: 全景、右: 舍利穴) 筆者撮影



影向寺塔心礎実測図 川崎市教育委員会 1981 から

図6 塔心礎 2

和44年の調査で柄穴の北側面に舍利穴が造られ、南方向と上部に開口している状態であったことが記録されている。

また、舍利穴の形状についても、①ドーム形、②楕円形、③円形の3種類に分けることができる。①ドーム形舍利穴については、飛鳥寺・高麗寺跡・崇福寺跡・西琳寺・野中寺、②楕円形は西山廃寺・影向寺、③は猪名寺廃寺である。①の中では、高麗寺跡・崇福寺跡の塔心礎は、西琳寺や野中寺の塔心礎の舍利穴より、蓋受けの加工が浅く造られている。また、②では、西山廃寺や影向寺の塔心礎は蓋受けの加工痕が無く、心柱の底部で舍利穴に蓋をしていたと考えられる。さらに、西山廃寺塔心礎の舍利穴は柄穴の底面と舍利穴の底面が丁寧に削られているのに対し、影向寺塔心礎の舍利穴は、柄穴の底面と舍利穴の底面の間に削り残しがある^(注2)。そのため、西山廃寺塔心礎の舍利穴の造り方を粗雑化している^(注2)と考える。③については、位置は特殊に見えるものの、舍利穴は円柱の形であり、当時の主流であった柱穴内部に舍利穴を設ける事例と加工の差が無いように見えた。

以上のように情報の整理・編年での位置づけ、観察を経て、8例の塔心礎については柱穴に接続する舍利穴を簡略化していった過程のものではないかと考える。さらに、西山廃寺の舍利穴については柄穴の北側面に造られているが、上部だけでなく南側に向かって開口している状態であるため、西琳寺や野中寺・高麗寺跡や崇福寺跡のような塔心礎の影響があるのではないかと推測する。そのため、6世紀末に創建された飛鳥寺の塔心礎の舍利穴の形状や位置を、7世紀中期から7世紀後期にかけて、西琳寺、野中寺・高麗寺跡・崇福寺跡・西山廃寺・影向寺が、舍利穴の位置や形状に独自性をつけつつ、前例の影響を受けた舍利埋納を行ったと考える。しかし、高麗寺跡・崇福寺跡の2例は、側面に舍利穴を造るような類例が見受けられないため、これらは国内の古代寺院の中でも特に異質な塔心礎であると位置づけられる。

仏教の交流の地であるインド・ガンダーラ周辺諸地域では、上部(中央部)に開口しており、南側面に開口した状態の舍利室や石棺、舍利容器は確認されていない。また、朝鮮半島においても同様の塔心礎は確認できない。しかし、中国の場合、7世紀から8世紀ごろに、従来の舍利を納めていた舍利室が、墓室のように発達した地宮に舍利容器が納められる傾向が多く見られるようになる。地宮は当時の中国の墓室と同じく南向きに開口している状態であり、こちらの共通点は岡林氏によって指摘されている(岡林2024)。

すなわち、塔心礎の舍利穴の大多数である中央に舍利穴を持つ塔心礎は、石棺を塔心礎に簡略化させた性質を有し、側面に開口した塔心礎は、岡林氏が述べる通り、後期古墳の石槨を簡略化させた性質を有しているのではないかと考察する。そして、こちらのふたつの性質は併存しながらも、次第に石棺を簡略化させた性質の塔心礎の数が増加していった

と思われる。特に高麗寺跡と崇福寺跡は柱穴では無く、側面に穿つことで、他の寺院と違う面を持ちつつ、かつ後期古墳を意識した埋納儀式が成立していた可能性があると思われる。

6. まとめ

以上のように高麗寺跡塔心礎の位置づけと特異性の再認識の検討を行った。高麗寺跡の塔心礎のドーム形舍利穴や、舍利穴の開口方位は、飛鳥寺や西琳寺・野中寺などから影響を簡略化した状態で受けた面と独自性を持つ面があると考察した。さらに、高麗寺跡の舍利穴は崇福寺に継がれ、西山廃寺の舍利穴の開口部に影響をもたらした可能性があることを指摘した。

そして、高麗寺跡の舍利穴の位置については国内で類例がないことを確認し、特異性の再検討を行った。今後は特異性のある舍利穴を採用した要因についての考察を進めたい。

(なかむら・まりえ=大阪市文化財保護課学芸員)

謝辞 野中寺と西琳寺塔心礎の観察および、本稿の執筆につきまして、近畿大学文芸学部名誉教授の大脇潔先生と元羽曳野市教育委員会の高野学様に厚いご教示・ご支援をいただきました。この場を借りて深くお礼申し上げます。

注1 尼崎市猪名寺の舍利穴は類例が無いため、舍利穴では無い可能性が示唆されている(花谷2016)。本稿では、穴の規模が他の寺院の舍利穴と大きな差が無いことから舍利穴と見なす。

注2 川崎市影向寺の塔心礎については、西山廃寺と比較して柄穴と舍利穴との間に削り残しがあることが、実測図から分かる。また岩井氏からも指摘されている。(岩井1983)

参考文献

尼崎市教育委員会 1984『尼崎市猪名寺廃寺跡』(尼崎市文化財調査報告第16集)

岩井隆次 1983『日本の木造塔跡－心礎集成とその分析－』(考古学選書20) 雄山閣

江谷 寛 2010 西山廃寺(足立寺)の発掘調査『同志社大学歴史資料館調査研究報告 第9集 南山城の古代寺院』同志社大学歴史資料館

梅原末治 1919「高麗寺址」『京都府史蹟勝地調査会報告』1 京都府

梅原末治 1939「高麗寺址の調査」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』19 京都府教育委員会

岡林孝作 2010「日本古代における仏舎利の奉安」『古代東アジアの仏教と王権-王興寺から飛鳥寺へ-』pp.203-230

岡林孝作 2024「飛鳥時代の舍利信仰における一側面」『器と信仰-東アジアの舍利荘嚴をめぐる美

- 術史・考古学からのアプローチ』 pp.295-316
- 香芝市教育委員会 2003『尼寺廃寺1 -北廃寺- の調査』
- 川崎市教育委員会 1981『川崎市高津区野川 影向寺文化財総合調査報告書』
- 木津川市教育委員会 2022『史跡高麗寺跡整備報告書』(木津川市埋蔵文化財調査報告書第27集)
- 佐川正敏 2010「王興寺と飛鳥寺の伽藍配置・木塔心礎配置・舍利奉安形式の系譜」『古代東アジアの仏教と王権 - 王興寺から飛鳥寺へ -』勉誠出版 pp.159-211
- 佐川正敏 2020、2022「東アジアにおける古代仏教寺院研究の考古学的新展開」東北学院大学アジア流域文化研究所編『アジア流域文化研究』 pp.9-25
- 滋賀県 1974『滋賀県史蹟調査報告』第10冊
- 田中重久 1938「山城高麗寺跡の調査」『考古學』東京考古學會
- 田中重久 1938「高麗寺創立の研究」『考古學』東京考古學會
- 田中重久 1939「塔婆心礎の研究」『考古學』第十卷第六号東京考古學會 pp.347-388
- 同志社大学歴史資料館 2010『南山城の古代寺院』同志社大学歴史資料館調査研究報告 第9集
- 土橋 誠 1984「府下遺跡紹介 18. 高麗寺跡」『京都府埋蔵文化財情報』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 内藤 仁 2017「塔心礎の排水機能に関する研究 (一)」『史迹と美術』878号史迹美術同攷會 pp.230-240
- 内藤 仁 2017「塔心礎の排水機能に関する研究 (二)」『史迹と美術』879号史迹美術同攷會 pp.230-240
- 内藤 仁 2017「塔心礎の排水機能に関する研究 (三)」『史迹と美術』880号史迹美術同攷會 pp.262-275
- 内藤 仁 2018「塔心礎の排水機能に関する研究 (四)」『史迹と美術』881号史迹美術同攷會 pp.308-316
- 内藤 仁 2018「塔心礎の排水機能に関する研究 (五)」『史迹と美術』882号史迹美術同攷會 pp.55-61
- 中村真里絵 2024「アジアの舍利奉安の系譜について」『大阪大学、関西大学、京都府立大学、明治大学、9大学合同考古学、古代史大学院生研究交流プログラム成果報告書』 pp.34-39
- 中島 正ほか 2011『史跡 高麗寺跡Ⅱ』(木津川市文化財発掘調査報告第10集) 木津川市教育委員会
- 奈良国立文化財研究所 1958『飛鳥寺発掘報告書』
- 奈良国立文化財研究所 2003『山田寺発掘調査報告』
- 奈良国立文化財研究所 2024『奈文研論叢』
- 奈良国立文化財研究所 2025『奈文研論叢』
- 奈良国立文化財研究所 2007『法隆寺若草伽藍発掘調査報告書』
- 羽曳野市教育委員会 1986『野中寺塔跡発掘調査報告書』(羽曳野市埋蔵文化財調査報告13)
- 花谷 浩 2016「猪名野に建てられた古代寺院の風景」『絲海』伊丹市文化財保存協会 pp.7-11
- 山城町教育委員会 1989『史跡 高麗寺跡』